

反ファシズム論の研究視点について

—フランスのケースを中心として—

平 田 好 成

『教えるとは 希望を語ること』

学ぶとは 誠実を胸にきざむこと

彼らはなおも苦難のなかで

その大学をふたび開いた

フランスのまんなかクレルモンに』

ルイールアラゴン『ストラスブール大学の歌』

—

一九七〇年代初めからいわゆる一九三〇年代論が、各種学界その他でようやく活発に論議されるようになって来た。京都大学人文科学研究所の共同研究による河野健二編『ヨーロッパ一九三〇年代』岩波書店 一九八〇年等を、未課題のテーマを取り組むその代表的な労作の一つに教えてよいであろう。^(一)

さらに、一九八〇年代は、いわゆる一九三〇年代の「危機」論が強度の脚光を浴びる年代となるであろう。五〇年とい

う距離が歴史に対して持つ重みと深さは、依然として、現代及び同時代史においてもその真实性を失っていないと言える。各国のいわゆる古典的ファシズム論が、量的にも質的にもますますその精緻さを増すのに対して、各国における反ファシズム論もようやく多角的に検証が始まり、かつ理論的、法則的な追及が行われようとしている。北原敦が紹介している、イタリアのレジスタンス史研究者G IIクアツァ G. Quazza のいう三つのタイプの反ファシズム、すなわち、政治的あるいは組織的反ファシズム、生存的あるいは自発的反ファシズム、それにファシストたちの反ファシズムという分析視角は、その一例であろう。⁽¹¹⁾

拙著『フランス人民戦線論史序説』（法律文化社 一九七七年一月）を公刊して早一〇年近くが経過しようとしている。筆者はその後、いわゆる四つの拙論は、今後筆者の採るべき研究の方向の一端を示している。拙著公刊のその年に、フランスでは、パリ第一大学（パンテオン・ソルボンヌ）歴史学講師で、同大学付設の社会運動及び労働組合運動史研究所 C R H M S S 幹事のJ IIジロー Jacques Girault の編著等が出版された。また、『同研究所雑誌』が一九七六一—一九七七年大学年度に第一号が発刊され、現在第七号（一九八二—一九八三年度大学年度）までが筆者の許に寄贈されている。前述した二つの拙論を通読すれば明らかとなり、これらの著作物によれば、筆者の専攻テーマに関して、とりわけ一九七〇年代に入ってから、当のフランスでは主に若手研究者及び専門の学生たちによる、かなりの量に上る各種テーマの論文が発表されていることが判明する。その論文数は、人民戦線論を含めた、ざっと七二〇種（その内訳は、雑誌第一号が約一一〇種、第二号が約二八〇種、第三号が約七〇種、そして第四号が約九〇種、第五号が約六〇種、第六号が約一〇〇種、そして第七号が約一〇種、例えば、

Catherine Bourrigand, *L'implantation du Parti communiste à Villeneuve-St-Georges entre les deux guerres*, *Matrise*, Paris I, (A. Prost, J. Girault), 1982. & Jean-Pierre Ferre, *L'implantation du PCF à Montreuil dans l'entre-deux-guerres*, *Matrise*, Paris I, (A. Prost, J. Girault), 1982. 等⁽¹¹⁾

合計約七二〇種）近くに達しており、かつ五〇年で各種文書の公開という原則を保持して来た国家文書（一九七一年七月二一日省令で一九四〇年七月一日（ヴィシー体制成立の日）までの分が公開）や県文書、市町村文書等の重要な資料が、三〇年足らずの時間的間隔で早目に公開されていることが判明した。^(四)しかも、これらの論文は、ほぼフランス全土にわたる地方史及び地域史的研究、さらに民衆史及び社会的的研究が、そのほとんどを占めている。前記した研究所に一部ずつ収録されている論文の中で代表的なものは、そのマイロクカードの再生が計画中であり、またオーディール AUDIER 社からは、それらのマイクロフィッシュの出版計画が進行中であり、さらにその代表的な論文は、叢書としてマスペロ E. Maspero 社、全国政治学協会 F.N.S.P. 出版部その他からその出版が予定されている。ところが、フランスにおける出版状況は目下極めて危機的な様相を呈しており、これらの出版計画も遅々として進捗していかないのが実状のようである。パリのモリスストレーズ研究所 I.M.T.（一九八〇年以降、その名称がマルクス主義研究所 I.R.M. に変更）もこれらの論文の複写注文に応じているが、その場合、その論文の著者及び指導教官たちの同意^{オトリザン}を得ることが必須な前提条件となっていて、手続面でかなり煩瑣である。同研究所はまた、モスクワのソ連邦共産党中央委員会付属マルクスレーニン主義研究所から同研究所に寄贈されて来た、コミンテルンフランス支部 S.F.I.C. 関係文書（マイクロフィルム）を目下整理中である。寄贈されて来たその関係文書は、一九三二年までの分となっており、筆者の専攻テーマに関しては、そのいわば前史を解明するのに留まるようである。これら大量な出版物の中で、現在目にするのできるものは極く限られた僅かな出版物にしか過ぎない。

拙著は、幾つかの著書及び論文の中で引用もしくは紹介されており、また書評も出された。^(五)拙著公刊以後に公表された内外の主要参考文献は、現在までのところ優に二五〇種類を越えている。これらの文献に、前記した七二〇種近くの論文等を加味すれば、かなりの量に上る資料が蓄積されていることになる。ところで、これらの研究論文は、博士論文等を含めて、その全部が第一級の資料と見做すことはできないとしても、これらの研究成果を十分に吟味しそのエキスを

吸収することによって、やがて全体史もしくは国民史的規模におけるフランス人民戦線の全体像が造り出されるであろう。筆者は、昭和五五年度にこの年度限りの文部省科学研究費補助金（一般研究(D)）の交付を受けた。研究課題は、筆者が一九七八年以降手掛けている「フランス人民戦線の地方史的研究」であった。その研究の目的の後段に示しているように、前述した拙著は、パリ中心の叙述に留まっている。一九七九年と一九八〇年に発表した前記二つの拙論は、パリ地方をも含めた新しい地方史的研究の方向を中心に叙述されており、こうしたいわばフランス人民戦線研究の拡散性をしっかりと把握した上で、今後はその集中性を指向し、フランス人民戦線の全体像の再構築を図るとともに、その科学的な歴史法則を解明していくことが肝要であろう。それまでにはなお、かなりの日時と多大の労力とを必要とするであろう。

一定の紙幅の関係があるので、一つの研究視点は、いわゆる地方史、民衆史及び社会的な観点を取り上げ、もう一つの研究視点は、いわゆるコミンテルン関係史、すなわち、具体的には、コミンテルンとコミンテルンIIフランス支部（フランス共産党 PCF）との相互関係の歴史的な観点を取り上げて論及する。とくに、後者の観点については、色々な論争点がよくやくゼラチン状態にはあるものの組上に乗っている現状である。

二

政治史や階級闘争史と言われている政治及び歴史科学は、あくまでそれらの科学体系の中軸構造を成しており、ここでいう地方史、地域史、民衆史（民衆闘争史）及び社会史等々のアプローチの方法は、就中、これらの中軸構造に対して十分に補完的な機能を果たし、かつそれらのエキスを十二分に吸収する立体的な寄与が可能であるという視点が、先ず指摘されるべきであろう。従って、政治史は、単なる事件史として狭隘化されてはならない。

これら前述した研究論文の大半は、修士号論文 *Mémoire de maîtrise*、略して *Mémoire* であり、少し研究密度の高い

学位論文 These 等は、当然比較的にその数が少ない。その論文集の中で筆者が最初に目にするのができた刊行物が、J II ジロー編著『両大戦間におけるフランス共産党の定着について』パリ、一九七七年、であった。この編著が、前記したモーリス・ストレーズ研究所（現在のマルクス主義研究所）の枠内で行われている、フランス共産党史について目下進行中の共同研究の一資料でもあることを筆者は紹介しておいた。フランス共産党の定着やフランス共産党と企業、とりわけ企業（経営）細胞等に関する研究テーマが、相対的に高い比重で選択されかつ論述されている。

前記した『社会運動及び労働組合運動史研究所雑誌』第四号によれば、一九八〇年四月一七日に同研究所とソ連邦科学アカデミー国際労働運動研究所との円卓会議が、パリで開催された記録が載っている。主たる討論のテーマは、第二次世界大戦前のフランス共産主義についてであり、先ず、史料編集の状況について、三つの大きな流れが、フランス側研究者たちから提起された。一つは、フランス共産党をフランス左翼全体の中に再生させ、社会主義との関連の視角から研究する流れ（C I II ヴィール Claude Willard）であり、次は、フランス共産党を第三インタナショナルの中に再生させ、コミンテルンとの関連の研究が中心的な地位を占める流れ（N II ラシーヌ Nicole Racine と L II ボタン Louis Bodin）、S II ヴォリコフ Serge Wolkow）であり、第三は、フランス共産党をフランス政治全体の中に再生させ、大きな国民的な諸問題との関連の視角から検討する流れ（J II フォーヴェ Jacques Favet、G II ラヴォー Georges Ravau）である。次に、フランス共産党についての歴史的研究は、次の四つの大きな局面について行われている。第一は、第三インタナショナルとの起源と関連の問題（例えば、A II クリエジエール Annie Kriegel 女史）、第二は、ボルシェヴィキ化の時期（例えば、D II タルタコフスキー Danielle Tartakowsky 女史、J - P II ブリュネ J. - P. Brunet）、第三は、一三四年の「転換点」の主導権がコミンテルンの側から来たのか（例えば、Ph II ロブリュー Philippe Robrieux、A II フェラ André Ferrat、B II ラジッチ Branko Lazitch）、それとも、フランス共産党側により大きな自主性^{オートノミー}があったのか（例えば、J II ブリュエ Jean Bruhat）とこの問題であり、これらの出来事は、J II ドリオ Jacques Doriot の除名と

同時性を有し、この問題については、J-Pブリュネの労作が一定の証明を与えている。第四は、人民戦線の失敗の問題であり、これについては、J-Jベッケル J-J Becker が、ダラディエ Edouard Daladier 討論集会の際、一九三八年一月以降、共産党は、反共和制闘争に方向転換を行ったというテーゼを発表した。ところで、これらの問題の解明は、まだまだ不完全であり、J-Jドロズ Jacques Droz は、何よりも、公共及び民間のあらゆる文書保管所のもっと広範な公開の必要性を強調した。

他方、ソ連邦側は、前記研究所所長のティモフェーフ Timofeev が発言し、目下ソ連邦では、一〇〇以上の国際労働運動に関する労作が発表されているが、その大部分がフランス共産主義に関するものであり、それらの印刷も現在進行中であると述べた。とりわけ、一九二〇年代に関しては、目下出版中の最近のレーニンの文書を中心に、フランス労働運動の歴史的特質が検証されている（ヴァルガ E. Varga）。J-Jジローは、両大戦間期フランス共産党の定着（とくに、選挙や党員数と政策や社会構造の関連性）について、P-Fリダンソン Patrick Fridenson は、共産党と企業について、それぞれコメントを加えた。V-Bバルマチノフ Veleri Balmachov は、ソ連邦における史料編集は、フランスのマルクス主義者、例えば、P-Lラファルグ Paul Lafargue やフランス共産党のレーニン主義者以外に、最近の研究では、フランス共産党の起源（一九一七—一九二三年）やフランス人民戦線の時期について精力的に行われている。とくに、一九三〇年代に関しては、行動統一の問題に大きな関心が集まっており、（フランス共産党）イヴリー全国協議会を中心とした研究対象、一九三九年九月のフランス共産党の態度を中心とした研究対象、それに一九三七—一九三九年の企業細胞が研究対象として選ばれている。それに、フランスに移住したロシア人共産主義者たちの証言を再録されている。なお、両大戦間のフランス共産主義を主とした国際労働運動に関する仏ソ両国の同種の円卓会議は、一九八一年中にモスクワで開催される予定になっている。⁽¹²⁾ところで、かつてK-Mマルクスが、政治研究の対象としてフランスを選好した伝統が、ソ連邦においても依然として継承されているのかも知れない。ソ連邦におけるフランス史研究の成果はよく知られており、かつ

ロシアにおけるフランス学の伝統の厚みが、前記した箇所に反映していると考えられよう。

続いて、『同研究所雑誌』第六号によれば、一九八一年九月二一―二三日、モスクワで、同研究所とソ連邦科学アカデミー国際労働運動研究所が第二回会議を開催された。ソ連邦のマルクスレーニン主義研究者たちとレニングラード大学とモスクワ大学の歴史教授たちと、フランスのドローズ教授、M||ローネイ Michel Lannay、J||ロベル Jean-Louis Robert (パリ第一大学教授) が会議に参加した。ティモフェーフ教授は、ソ連邦における労作、すなわちフランス労働運動、その歴史が発表されている。就中、両研究所間に、協調の発展が見られる。三つの大きなテーマ、すなわち、フランス共産党の起源と開始、人民戦線の期間中のフランス労働運動、それに史料編集及び図書館の問題がそれぞれ論議されている。第一のテーマは、二つの報告が行われた。J||ロベルが行った「トゥール大会におけるレーニンの参照」であり、国際労働運動研究者チェルヌーカ Tchernoukha 女史が行った「フランス共産党と一九二〇―一九二五年フランスにおける労働組合運動」であった。第二のテーマは、六つの報告が行われた。先ず最初に、ドローズが「一九三三―一九三六年ナチズムに対するフランス社会党及びフランス共産党の態度」の報告を行った。彼は、平和主義の比重として両党に共通したイデオロギー的重要要素の重要性、大衆現象としてナチズムの分析における不十分さ、そして、ナチ体制の早急な崩壊の信頼を改めて強調した。社会党にあって、一九三五年三月まで、レオンブルムは、優先性を軍縮のための闘争に置かれた。それ以後、社会党内に、国防に有利な右派、平和主義的な中央派、敗北主義的な潮流を爆発するマルクス主義的な左派、そして国防に結集し、フランス共産党に接近する潮流が見られた。このように、社会党は矛盾した態度を採っていた。一九三六年まで、フランス共産党は、ドイツ社会民主主義の裏切りと、ソ連邦に対するナチ体制の敵対性を強調した。M||トレーズが言うように、ナチズムが同様にフランスを脅威している。二つの左翼政党が、自覚することを遅いと言っている。一九三六年の選挙運動は、平和主義的なそして反軍国主義的な色調を帯びている。エゴロフ Egorov (レニングラード大学教授) は、「現代史料編集における人民戦線の経験と教訓」の報告を行った。

一九三六年六月の「失敗した革命」は、失敗した。左翼政党間の矛盾は、外因的な要素（スペイン戦争）や財政的な反動に対する政策に関する人民連合綱領の非適用に関心を持つている。経営者全体が、ブルム政府に反対している。さらに、MIIローネイは「両世界大戦間のフランスIIキリスト教労働者同盟 CFTC と労働運動」の報告を行った。フランスIIキリスト教労働者同盟は、共産主義とフランス社会党に対して二つの違った態度を採っている。また、労働総同盟と統一労働総同盟に対して二重の行動様式を採っている。いわば、反共主義及び反社会主義の砦となっている。また、「反ロシア的」な性格を持つている。国際共産主義が、第一号の敵であった。一九三六年、フランスIIキリスト教労働者同盟の態度は、再統一された労働総同盟に対して攻撃をした。LIIヨッフエL. Ioffe（国際労働運動研究所研究者）が、「トゥールーズ再統一大会」の報告を行った。労働総同盟は、党に対する独立の態度を採っていた。さらに、階級的地位をも採択していた。第三のテーマは、三つの報告が行われた。VIIルーペーズ V. Roupez（国際労働運動研究所研究者）が、「フランスにおけるキリスト教労働組合主義の図書館」の報告を行った。また、RIIマトヴェーフ R. Matveev（マルクスIIレーニン主義研究所研究者）が、「フランス労働運動における民主主義的伝統」の報告等を行った。^(七)

一九八三年四月二二日、討論がパリで行われた。テーマは、「第二次世界大戦後のフランス労働組合主義」であった。ソ連邦から、ボゴラッド Bogorad（国際労働運動研究所副幹事）、ヴァシレンコ Vassilenko（同研究所研究員）が出席し、フランスから、AIIベルグニイウAlaine Bergounioux、AIIラクロフ Annie Lacroix、そしてAIIプロスト Antoine Prost が出席した。その後、モスクワで、テーマが、「二〇世紀初めのフランス労働運動と一九五〇—一九六八年のフランス労働者階級」を中心に論議される予定である。^(八)

フランス反ファシズム論は、フランス人民戦線のいわゆるフランス統一戦線論の段階であった。すなわち、その段階は、一九三四年二月から六月までの期間である。ところで、『マルクス主義研究所（IRM）歴史雑誌』一八号（一九八四年七、八、九月）が、「一九三四年、ファシズムか人民戦線か」という論題で、五〇年前の歴史的な論述を行っている。例えば、五〇年前、共産党文書（一九三四年二月—一九三四年六月）の未刊原稿のものが、公表された。とくに、J IIドリオは、攻撃の的になっていた。

先ず、R IIマルテリ（IRM幹事）Roger Martelli は、「一九三四年への序文 フランス共産党、コミンテルン及びフランス」と題する論文を発表した。

一九三四年は、第三共和制の最後の数年に対象とする、歴史的な大論争の中心である。すなわち、二月の諸事件、ドリオの問題、人民戦線の最初の揺籃期、コミンテルンの役割は、討論以上に引き起こした。『IRM歴史雑誌』は、モスクワのマルクスIIレーニン主義研究所に登録された資金から由来し、共産主義インタナショナルIIフランス支部 SFI C の文書から抽出されている。われわれは、すでに、数多く繰り返し返して、一九三二年まで以前の資料を公刊した。ところで、今や、D IIタルタコフスキーによって提出され、情熱な年一九三四年に関する資料が見られる。

最初のテーマは、恐慌中の政治体系である。右翼は、長い間再組織することを求め、ファシズムに接近する「諸団体」の側で摸索し、とくに、タルディュー流の戦略的な建築を指示している。右翼は、変形された政治体系、合理化された国家、そして、フランス資本主義と公権力のすべての再構成を漠然と予感する。急進党員ダラディエの中で同様に社会党員ブルムの中で、前途は、現存するフランス政治機構の未来である。両者にとって、ファシズムは第二義的な現象であり、狭く諸団体に限定された現象である。共和制は、君主主義の危険、次いでブーランジェ主義の危険を克服した。共和制

は、ドレイフュス事件によって騒ぎ立てられた情熱でもって危険をよく乗り切った。共和制は、再びファシスト的な現象に勝利するであろう。一九三四年二月六日は、恐慌の現象を急がせ、急進党的な及び社会党的な機関を迷わせ、しかし、一挙に全体として政治的な再建築を引き起こさない。好むと好まざるとにかかわらず、急進党は、『国民連合』というドゥーメルグ内閣の支持に参加している。社会党は、もう少しで分裂しているし、いつまでもドイツ及びオーストリアの例証について熟考し続ける。社会党は、反ファシスト的な闘争の正しい戦略の諸条件について突き当たっている。

次のテーマは、フランス共産党と政治体系である。誕生から、フランス共産党は、希望とまったく同時に拒絶と恐怖を深く表現している。拒絶は、政治体系の拒絶である。この拒絶は、フランスでは革命的サンディカリスムの伝統から受け継がれている。党は、自発的に労働者行動の絶対的自治を断定する気にさせる。この拒絶に対して、基本的な恐怖が関係している。その恐怖は、階級協調の、そして、『神聖同盟』の古い恐怖である。フランスにおいて、ボルシェヴィキ的なモデルの、そして、共産主義インタナショナル（コミンテルン）によって永久に繰り返された伝言の、初めの威嚇は、大きく関係している。希望に関して、希望は拒絶の対位法である。ロシアにおいて現実であり、フランスにおいて準じる神話的なモデルであった。ソ連邦に対する参照は、フランス共産党員たちの制限的な、戦闘的な共有を接合する。フランス労働者運動は、労働者自治の強靱な意思と共和制的統一の革命的伝統との間に、伝統的に引き裂かれた。疑いもなく、一九三四年に、この年は、フランス共産党の指導的幹部たちをなお大量に活発にする、拒絶と希望との二重の感受性である。

次のテーマは、コミンテルン、ファシズムと統一である。『階級対階級』の方向の決定は、一九三〇年代の初めから、ヨーロッパファシズムの上昇する現実に突き当たろうとする。コミンテルンにとって、ヒトラーの権力への到来は、ここ数年間、展望を修正しない。ドイツの事件は、一九三三年三月初めに、『統一戦線』の主導権の激発を引き起こす。コミンテルンは、数年来初めて、一九三三年三月五日、社会民主主義の指導部たちと協定の可能性を承認し、共同行動の持

統期間中、批判の中止を提案することまでする。フランスの指導者たちは、直ちに国際的路線においてこの修正をしつかりつかみ、そして、交渉はフランス共産党とフランス社会党 S F I O の間で参加する。だが、交渉は事実非常に早く突き当たる。とくに、ブルムは、拒絶の態度に閉じ込められる。二つのインタナショナル（コミンテルンと社会主義労働者インタナショナル I O S ）は、予備的な協定なしである。失敗の外傷は、一九三四年の初めから、共産党の反省を強く烙印するであろう。しかし、統一への波は、従って短い期間である。コミンテルンは、交渉が社会党指導者たちと不可能であるという、確信をすべてこの波瀾で引き出す。一九三三年は、だから統一への調整に通じないで、逆に『社会ファシズム』の拒絶における硬化に通じる。最も大胆な試みは放棄され、次いで批判された。フランス共産党員たちは、彼らの交渉を急ぐことに容赦されない。一九三三年一月、コミンテルン第一三回大会^{プレム}で、ピアトニツキー Piatonik は、この批判の大綱を作成するであろう。すなわち、フランス指導部は、『主要な欠陥』、すなわち、『右翼日和見主義』として当時現われる問題に対して負けた。それは、『階級対階級』戦略の再開集会である、第一三回大会は、諸共産党の側で自己批判を瀕発させるようになる。モリスストレーズ自身は、フランス共産党の『日和見主義的な傾向』を認める。すなわち、人々は、もはや社会民主主義に甘くないであろう。そして、人々は、社会党指導者たちとのあらゆる接触を警戒するであろう。統一戦線は、改良主義的な指導者たちに対抗して社会党系労働者たちとともに、具体的な階級的行動においてしか実現するであろう。（トレーズ、選集、二巻、五号、パリ、エディシオンソシアル、一九五一年、一六九—一九九頁、『フランスにおける現実の状況とフランス共産党の任務』。）それは、一九三四年の初めにフランス指導部の調停^{トモテイシフ}の中心思想であり、一九三四年一月に中央委員会の開催とともに最大のテーマ研究であろう。トレーズと彼の仲間たちは、その後第一三回大会の仕事にしっかり支えるであろう。J II ドリオは、一九三三年末から、他の指導者たちと一線を画し始める。ドリオは、非常に早く、社会党の、労働総同盟の指導部たちと一緒に直接的交渉の唱導者となろうとしている。（J P II ブリュネ『ドリオの分裂についての反省（一九三四年二月—六月）』『社会運動』誌、七〇号、一九七〇年—

三月)

次のテーマは、共産党員たちとファシスト的な圧力がある。フランス共産党の政治的用語は、永久にファシズムと民主主義の本質的な連続線を示唆する。用語は、『民主主義的な幻想』を破壊し、そして、選択肢（資本独裁かプロレタリアート独裁か）について反省を方向づけると思っている。第一三回大会の路線は、かなり、とくに『ファツシヨ化』と『社会ファシズム』という、フランス共産主義のテーマ研究を凝結させる。フランス共産党は、一九三四年の初めに、単なる諸団体の現象に一点に集中されなかった。フランス共産党は、一九三四年のまったく初めに諸団体の圧力自体に向かつて部分的に不意に襲われる。『マルクス主義研究所（IRM）歴史雑誌』一八号、一九八四年の中で、DIIタルタコフスキーは、（一九三四年）二月のためらい、二月六日以前の中央デモの待機と拒絶、二月六日自体の混乱、スローガンと具体的な展望の不確かさを思い起こす。（例えば、SIIヴォリコフ『フランス共産党と人民戦線』『フランス共産党II段階と問題 一九二〇—一九七二年』の中へ、パリ、ES、一九八一年。）同じためらいは、二月一二日の大事件にまで続く、数日において現われる。第一三回大会は、必要な参照であり、二月初めから、ドリオ現象を姿を現わす。すなわち、ためらいは、二月に、政治的な主導権の展開をもちや妨げない。急進党員たちは暴動によって狼狽させられ、さらに、社会党員たちはグラディエの降伏によって途方に暮れさせられたことに反して、フランス共産党は党の政治的孤立から利益を得て、そして、二月九日デモを行う。しかし、共産党は、フランス社会党及び労働総同盟の主導権の前に何をなすべきか。共産党は、セーヌ県及びセーヌIIオワーズ県の社会党連盟によってなされた共同の主導権の提案を確実に拒否する。拒絶する方法は、しかしながら多くの責任者たちの中で疑念を残している。責任者たちが、二月一二日の運動に直面したどのような態度を採択すべきかを知ることである。二四時間のゼネストの提案は、二月七日から五つの統一労働組合によって投ぜられた。労働総同盟によって選ばれたその日、二月一二日にこのストの決定は、従って当然であり、事態は参加の様式自体にとって明白ではない。われわれは、常に『日和見主義的な幻想』を告発し得るし、唯一の批判の有効性

は疑っている。すべての目は、パリに向けられている。カシヤン M. Cachin の論説は、二月九日以降、次のように明白に示唆する。すなわち、共産党そして青年部のアピールは、二月一〇日に発表された、それについて一言も言わない。実際、一〇日の日に、決定は、ジュオー G. Jouhaux の最初の意見に反して、フランス社会党によって希望されたデモに参加することを決めた。多数の著者たちは、決定的な衝撃が、有名な『勝利者たちの大会』という、ソヴィエト共産党の第一七回大会の間に、モスクワから来るということを示した。ある著者たちは、キーロフ Kirov が、当時その影響力の絶頂期にいた、社会党及び労働総同盟のデモに参加のために傾いたということを考慮さえする。この点について、文書は無言である。コミンテルンは、とくに、かかる修正に対して当時真に準備をする。共産党指導部は、内部の危機の不安な機構に直面し始め、第一三回大会の路線をしっかりとつかみ、二月六日の翌日のためらい、そして、最後の分析で、要するに、結局政治的孤立の重大な危険を認識するようになる。社会党及び労働総同盟の除外にもかかわらず、二月一二日の参加の決定は、フランス政治史をマークする。人々は、確実な修正、あらゆる場合に戦略的な訂正を理解することはできる。

次のテーマは、(一九三四年)春の対照である。共産党幹部たちの最初の不安は、二月一二日の直後に、『右翼日和見主義』の可能な非難に対して身の潔白を示すことを証明することである。二月から、コミンテルンの指導部は、社会党員たちに対して打撃を集中することに適し、第一段としてソヴィエトのために闘争を置くことに適する、教訓を引き出す。人々は、フランス出版物の中にこれらの分析の反響を容易に見出すであろう。新しい矛盾は、第一三回大会の動向のこの確認によって生起する。実際は、二月一二日の後、すべての左翼の政治勢力は、新しい事実、反ファシストリーダーの周りに、重要な政治的動員でもって対決されている。急進党員たちは、ドゥーメルグ政府に対して自分たちの支持の囚人たちになっている。社会党員たちは、ファシズムの問題を諸団体の現象に制限し続け、うまずたゆまず『共和制の防衛』を参照し続ける。社会党員たちのファシズムと展望の分析は、反ファシズムの活動の場の中でふさがった主導権を強

化する、二月諸事件によつて修正されない。最も重要なことは、アムステルダムIIプレイエル運動と競合している、監視委員会 C V の創設でもつて、三月初めからはつきりする。フランス共産党にとつて、問題は極めてずっと複雑である。いかなるためらいは、反ファシスト的な闘争の必要性の前に明らかにならない。『制度上の幻想』に関する深刻な不信、ソヴィエト民主主義に対立していたブルジョア民主主義の建設者II理論的な批判、すべてのブルジョア独裁は本質的に同一であるという確信、恐慌とファシズムの上昇を結合する関係の適切な分析、これらすべてのものが混じっている。一九三四年の春に、中央委員会の前にジットン Gitton の文句のように、選択肢は、ファシズムと共産主義の間にある。この重大な戦略的局面は、反ファシスト闘争のプロレタリア的な内容を明確にする問題について、共産党幹部たちを就中アクセントをつけるような気にさせ、企業及び諸要求についてあらゆる努力を集中するような気にさせる。この局面は、疑いもなく二月諸事件の直後に共産党の進め方の主な獨創性である。社会黨員たち及び労働総同盟員たちは、諸団体に反対する闘争、共和制の防衛、そして計画プランによつて革新を結び合わせる三部作の周りに、それらの干渉を構成する間に、共産黨員たちは、いわゆる『国民連合』政府、やがて緊急政令テケレロフに反対して彼らの打撃を優先して集中する。反ファシスト連合の中心点は、共産党幹部たちにとつて、二月六日の直後に、要求闘争、労働組合の行動、そして企業における『統一戦線委員会』の特殊な構造の設置である。社会党指導部たちと接触を保つことは、敵対者の活動の場に位置づけることであり、『社会ファシズム』の前に降伏することであり、コミンテルンに背を向けることである。社会党の組織、さらに特別にフランス社会党のパリ連盟との直接的な関係は、管理するのにもっと複雑になっている。事実、パリ連盟は、三月初めにパリ連盟の統一の提案を再出発させる。三月六日に公けになったパリ連盟のリードは、二日後、M II トレーズによつて批判された。すなわち、彼の論文は、二月諸事件は『社会民主主義について共産主義の最初の勝利』であつたということを確認する。(『ユマニテ』紙、一九三四年三月八日)三月一三日、フランス共産党は、社会党連盟に対して、下部委員会並びに自衛集団は選ばれるという条件で、共産党が反ファシスト的な行動の共同の構造について一致しているというこ

とを返答する。そういう条件は、就中、反ファシスト運動におけるその指導する役割で、心配する社会党によって受理され得なかつた。『反ファシズム闘争はただ社会党の行動として、そして社会党の原則の精神の中で指導され得る』という説明する、一九三四年三月一日のフランス社会党の全国評議会に対して、『社会党とのブロック（連合）』を拒否し、共産党の組織が『行動統一戦線を実現するために努力を倍化する』ように巧く勧める、三月二〇―二一日の（共産党）中央委員会がまつたく当然に返答する。（『カイエールデュールボルシェヴィスム』誌、七号、一九三四年四月一日、三九九―四〇二頁。）二月後の全期間は、事実ドリオの問題によつて支配される。人々は、三月の中央委員会、最初六カ月の政治局の会合、さらに六月の（イヴリー）全国協議会を観測する時に、人々は、ドリオの問題について一点集中^{ポラリゼーション}は、事実戦略的反省を一括することを容易に確認する。指導する集団は、選択肢、すなわち、第一三回大会の路線あるいは社会党員たちとの交渉の周りに、討論することができる。トレーズは、三月に、彼は上部での交渉の可能性を排除しないという、中央委員会の会員たちの前に、正確にいうことに専念する。だが、これらの交渉は起っていないと、彼は付け加える。路線は、終始一貫一九三三年二月（第二三回大会）の路線である義務がある。（IRM文書、六八五、一七三頁。）このような決定は、五月の反ファシズム全国連合の広範な主導権、反ファシズム知識人監視委員会 CVIA の方向で開催、連盟内テスト内の統一労働組合の活動（例えば、鉄道労働者たちの活動）を妨害しない。このような決定は、大部分、全国的な政治的レヴェルについて共産党の行動の実質的な展開を阻害している。^(九)

次のテーマは、国際的な開催である。実際、コミンテルンの側で、重大な戦略的封鎖解除が当時生まれるであろう。ますますはつきりした不安は、ナチスドイツの膨張主義的な軽い気持の前にかように確かな事実となる。（モロトフの演説、『インプレコール』一―二号、一九三四年一月。）フランスの二月二日とその結果は、社会民主主義とファシズムを同化するスローガンの直接関連性について疑問を引き起こす。Gディミトロフと彼の仲間たちは、一九三四年二月二七日（ライプツィヒ裁判から）釈放され、直ちにモスクワに再びたどり着く。ディミトロフは、間もなくスターリンによつ

て迎えられた。スターリンは、デイミトロフにコミンテルン指導部を委ねる彼の決定を知らせる。四月半ばまで、人々は、変化の何らかの確実な標識をしかし認知しない。コミンテルンの公式の雑誌は、三月に、社会党員たちによって思い起こした『両党間の休戦』の仮定を批判し続ける。四月末まで、『社会ファシズム』に反対する闘争は、良い共産党の動向の決定的な標識である。実際ただ五月に、すべてのものが動き始める。五月一六日から、ドリオを非難する（コミンテルンの幹部会は、トレーズとフランスの幹部たちを統一の主導権の中でもっと卒直に促進するように仕向ける。（マヌイルスキーの調停。）五月二三日、『プラウダ』紙に現われた二つの論文は、はっきり転換点をマークする。それらの中の一つの論文は、トレーズによって署名される。トレーズは、社会党に送った直接の提案に有利な転換点に確認される。五月二八日、幹部会は、次の年（一九三五年）に開催されるはずである、第七回大会の準備の暦で公然と決定する。五月三一日、フランス共産党は、社会党の指導部に対して、ナチスによって投獄されたE・テールマンのために共同のキャンペーンを行うため、提案を差し向ける。六月一日、社会党員たちと共産党員たちは会合しており、その同じ日に、コミンテルンが、フランス共産党及び数多くの他の共産諸党に対して、統一運動を速めることを強く勧めるために、手紙を差し向ける。（ヴァサールの手紙。）二つのフランス党の再会は、確かに失敗に帰着する。しかし、政治局は、後の交渉に門を閉じないで、批判を行うことを決定する。六月二五日、トレーズは、むしろ和解する演説を議会に発表する。（トレーズ、選集、二巻、六号、パリ、一九五二年、一二四—一二九頁。）一九三四年六月の初めに、『コミンテルン』雑誌は、第一三回大会の精神によって非常に直接的に鼓舞され、『いわゆる革命的なブルジョア民主主義』について砲火を集中する、エルコリ（トリアッティ）の論文をなお発表する。すなわち、『革命的なブルジョア民主主義』の『破産』は、必ず、『単なる可能な革命的な民主主義』、すなわち、『プロレタリアート独裁』を要求する。エルコリは、社会党員たちに反対する闘争、そしてとくに（社会党員たちの）『左翼』に反対する闘争を洞察し続ける。すなわち、決定的な要素は、『統一（…）への大衆の圧力を、ファシズムに反対して、ブルジョアジーと、プロレタリアートの真中にいたその手先たちに反

対して、まったく第一に社会党の指導者たちに反対する、革命的な統一戦線への圧力として変化させること』ができる。（エルコリ、『コミンテルン』誌、一一号、一九三四年六月五日、六八一—六八九頁。）だが、最初の重要な修正は、第七回大会の準備委員会の集会の時、すなわち、六月一四日に記録される。その集会で、マヌイルスキー Manuiskii は、『プロレタリアート独裁』のスローガンを後方に置くようにはつきりと提案する。同じ集会の時に、クーシネン Kuusinen は、有意義な戦術的変更の必要性を思い出させるであろう。ヨーロッパの状況の進展は、外交、すなわち、ソヴィエト外交の基礎的なデータを漸進的に修正する。一九三三年三月から、フランスにある程度の接近の希望は、明らかに開始されるようになる。だが、こうした変化は、なお不確実なようである。まったく一九三四年の間に、ソ連邦はナチスドイツを見る希望を完全に放棄したようには見えない。ソヴィエトロシア人たちは、もちろんコミンテルンの責任者たちと同様に、ナチス独裁の崩壊の考え方を養うことに固執する。ソ連邦の外交の動向は、戦略的な狙いを養うために十分に安定したという風には見えない。外交的なレヴェルにおいて、運動が一九三四年の春に急進展する。すなわち、四月に、ソ連邦とドイツの間の共同保障の可能性が崩壊し、五月に、Ljellbert Louis Berthou がリトヴィノフ Litvinov に相互援助協定を提案する。（AIIアゴステイ、『歴史雑誌』三四号、一九八〇年。）だが、控え目なスターリンは、なお直接的に掛かり合いにならない。彼は、就中、コミンテルン指導部とソヴィエト代表者たち自身を妨害する。もし、マヌイルスキーは公然とデIMITロフの心配事に敏感であるならば、ロゾフスキー Rozovski とピアトニツキー Piatski は一九三三年末に決定された（第一三回大会の）戦術の維持にもっと結びつけられる。ソ連邦の外交の変更は、定期的に調整を容易にする。だが、一九三四年の春に、実はコミンテルン内部で、紛争が展開する。（C—AIIヴァサル『フランス人民戦線のモスクワ起源』一九六六年。）ソヴィエト権力への参照は、夏の間、コミンテルンとその支部の基本的な資料を散らまき続ける。（KIIラデク、『インプレコール』一九三四年七月一四日号。）新しい反省は、コミンテルンの幹部たちの間で全会一致を作らない。しかし、六月の第二の二週間に、その一致、統一の過程に刺激を与えるために、是非必要とな

るかも知れない。(ベラークン、『コミンテルン』誌、一三号、一九三四年七月五日。) フランスは、当時非常に早く、実験の重要な活動の場に成り得る。

次のテーマは、統一への前進である。共産党員たちと社会党員たちの間に、橋は決潰されない。マヌイルスキの指示によって、また(一九三四年)六月一日のコミンテルンの手紙によって力づけると言った自覚した、トレーズは、その後交渉の主導権を押し進めることを決定した。決定的な瞬間は、トレーズに対して、フランス共産党全国協議会の前に、すなわち、六月末に演じる。若い書記、トレーズが説明する報告は、すでに評価できる変化を表現する。その前提は、六月に沿って共産党指導部の反省を次々と生じた。あたかもトレーズは、一部分一九三三年の末—一九三四年の初めの硬化の囚人であったかのように、あたかもドリオの影は、なお彼の個人的な約束を制約したかのように、大胆さはしかしながら控え目である。六月の初めから、フランスの幹部は、統一の前のためらいが共産党の主導権の主要な障害物を構成することを納得させる。(IRM文書、六八九、一〇八頁。)しかし、その幹部は、党内で中間的な幹部たちそして最も積極的な活動家たちの反動によって確信したようには見られない。その幹部が発言する(イヴリー全国協議会)閉会演説は、ずっと確信のあるように示す。大部分の著者たちは、協議会の開催中、マヌイルスキによって差し向けられた電報の仮定を取り上げる。(AIIアゴステイ、前掲書、七二五頁。)しかも、文書は、トレーズが、協議会の後に集まった政治局の前で、社会党員たちと交渉を急がせる必要性を対象とする電報を読み上げることが、今日になって暴露する。(IRM文書、六八九、一三五頁。)われわれの知識の現状では何でもないことは、これらの仮定の間一刀両断に解決することはできない。人々は、トレーズによって実践された再統一における速さを注目できる。明らかに、人々は、少なくとも、コミンテルンの反省となる問題と一九三三年春からフランス指導部の反省である実践との間に、同時性を見分ける。『社会ファシズム』の修飾語を一举に問題視しながら、ディミトロフは、あらゆる状況の中で、社会民主主義は、『ブルジョアジーの主要な社会的支柱』としてよく機能を果たしたかどうかについて自問することまでする。ディミトロフ(ブルガリア

幹部）は、『主要敵』として左翼社会党員たちの指名を、『労働者階級の意識的な裏切者たち』の機能に改良主義的な幹部たちの全体を含む方式を、一つずつ破壊する。デイミトロフは、統一戦線戦術と言われる問題の再検討に専念する。この戦術は、もはや『社会民主主義の敗北のため術策』である義務ではなく、『ファシズムの前進に反対する大衆闘争の発展の現実的な要素』である義務がある。この事実から、社会党指導部たちとの協定の心配事は、一掃されている。同じ報告は、極端に中央集権主義の実践がコミンテルンとその支部の間の関係の中でもはや勝る義務があるという、結論として注目する。第七回大会をそしてその将来に、コミンテルンの活動における顕著な変更の緊急は、強調されるであろう。しかし、デイミトロフのすべての草案は、今後共産党の活動にマークする、環境条件の変化を証言する。（デイミトロフの演説）六月末から、フランス共産党は、従って当時社会党を妨害する、内部の矛盾に賭けるため、行動の自由を持っている。ドリオによって指導された企ての決定的な失敗によって力づけられた、フランス指導部は、新しい提案を行うため、ずっとくつろいで感じる。トレレーズは全国協議会に論戦なしで思い出した、『不可侵協定』の社会党の提案をしつかりつかんで、フランス共産党の政治局は、ファシズムに反対する統一闘争協定の提案とともに、接触を再出発させる。手際よく、共産党員たちは、ノール県の社会党連盟によって作られた計画を討論の土台として選び、かくして直接に社会党の討論で結びつく。七月一五日に開催されるフランス社会党全国評議会は、従って二カ月前で開かれた、トゥールーズ大会以来突発する進展をただ記録することができる。顕著な多数派は、行動統一協定を考慮して意見を述べる。最後の困難は、抵抗できないと言った運動をもちやブレーキをかけ得ない。そこで、一九三四年七月二七日、協定はついに署名された。フランス共産党は、重大な譲歩を受容した。すなわち、譲歩は、『民主主義的諸自由』の防衛の言及であり、共同行動の間の相互の攻撃と批判の中止であり、『両党の各党の七名の代表者によって構成された協調委員会』の形成である。共産党員たちは、従って下部委員会の選挙を獲得しなかった。彼らは、緊急政令に反対する可能な行動手段の間にストライキへの参照をもちや獲得しなかった。これに反して、共産党員たちは、緊急政令に反対する、さらに『戦争の準備』に反対

する闘争への協定をどうにか拡大し遂げる。彼らは、ドイツにおけるそしてオーストリアにおけるファシスト・テロルに反対する行動の言及を獲得し、議会の解散の要求として比例代表制の採択の要求を獲得する。(『AII ヴァサル、』『コミンテルン』誌、一六号、一九三四年八月二〇日、一〇四〇—一〇五一頁。)そして、社会黨員たちは、彼らの側で、協議委員会の中で、プロレタリア統一党 PUP の共産党脱党者たちの出席を断念する。相互の譲歩の意義は明白であり、二つの署名者の間に勢力の均衡の限度を描写する。すなわち、共産黨員たちは、大きく協定の内容について勝利し、しかし、慎重な形態は、ほとんど全体に、社会党の提案にそっくり似せられる。

最後のテーマは、新しい局面である。共産党は社会党と行動統一協定を署名する時に、フランス共産党は、完全な戦略的な革新に行ったところではないし、トレーズは、イヴリー全国協議会における彼の閉会演説の中で、『新しい路線』あるいは『転換点』の思想をはつきり認容しない。なお、人民戦線の第一歩の新しい経験は、そして、コミンテルン第七回大会によって行われた秩序の回復は、期待すべきであろう。人々は、決定的な衝撃は六月に与えられたということをしかり考え得る。たとえ、トレーズと彼の仲間たちが、その演説の主要な位置に政治的な交渉を着手することを三月に拒否したとしても、たとえ、トレーズらは『民主主義的幻想』に直面して、なおソヴィエト共和制を褒めそやしたとしても、トレーズと彼の仲間たちは、七月に『民主主義的諸自由の防衛』を挿入する『協定』を受容する。この衝撃的な革新は、六月末から、範を示す国際的な過程の中で挿入される。数カ月早く、フランス共産党を一九三三年春に社会黨員たちと交渉することを希望したということに対して批判した同じコミンテルンは、一九三四年五月にもっと柔軟に同じ幹部たちを勧告する。フランスの調整は、一九三三年秋から一九三四年春夏にもっと敏速にそしてもっと柔軟に、他の諸国よりはフランスにもっと大胆にそしてもっと効果的で成熟する。一九三四年は、国際的な全体の中でフランス共産党の挿入がその当時提起する問題の良い模範である。実際は、フランス指導部は、一時外交的な不安、コミンテルン指導部を分裂させる疑問をそして二月諸事件から生じた反ファシスト活動の固有な論理を集中して見る、実験の国際的な局面で利用すべきであつ

た。コミンテルンの中で最も革新的な要素は、フランスの模範に支えられるであろう。その後、人民戦線は進行中である。フランス共産党とフランス社会の間の決定的な出会いが行われる、新しい局面が始まっている。⁽¹⁰⁾

四

続いて、DIIタルタコフスキー（パリ、JIIルBIIセイ国立高等中学校、IRM編集委員）によって選択され、提出された『共産党文書 一九三四年二月—一九三四年六月』が、発表された。

（マルクス主義研究所 IRM）『歴史雑誌』（二八号、一九八四年）は今提出する資料は、ほとんど全部、未刊原稿であり、IRM文書のリストを記入する基金から生じる。このデータは、FIIガルバルツFanny Garbarzの協力によって、一九三四年の書記局、政治局及び中央委員会の速記録の精査から、一九三四年五月の大会の（部分的な）速記録からそして六月（イヴリー）全国協議会の速記録から実現された。われわれは、この沢山の資料において仕事をしなければならなかった、必要不可欠の選択は、二重の気懸りによって道案内させられた。すなわち、気懸りは、最も近い所に常に開かれた史料編集の問題を範囲を定め、さらに、接近する資料よりもとくに未刊原稿の資料を公表することである。一九三四年にフランス共産党の歴史の最良の理解に必要な未刊原稿の資料の全体は、もっと広範な枠組の中で、とくに沢山の公開資料の中で、しかし復元されるべきものである。

最初のテーマは、一九三四年二月六日の直前にということである。共産党中央委員会は一九三四年一月二三日に開かれる時、新連合は一八カ月以上にわたって権力の座に就く。フランス社会党は、一九三三年末に、右翼、中央派、左翼となっている。『内閣参加派たち』（右翼）は、ファシスト的な攻撃性を論拠にし、『共和制の防衛』の政策の必要性を納得させるため、国民連合とファシズムの間の類似を強調する。左翼は、その番に、ドイツの実例を援用しながら、内閣参加

派たちのテーゼと戦う。新社会党員たちは、党の左翼で、ファシズムは追い詰められた大資本に仕えている欲得ずくの人々の単なる企てではなく、恐慌は生成する深い現象であるということに承認する。デアデーは、反ファシスト委員会によってではなく、ファシズムへの道路を妨害しないであろう。マルケMargueは、秩序、権威、国民という、有名な三部作を發展させる。フランス社会党は、当時歴史の教訓を引き出す。すなわち、ドイツの社会民主主義は、その左翼を除名したばかりである。フランス社会党の中央派は、党の右翼を破壊するため「社会党の戦い」紙に寄り掛かる。党の右翼は、大会の決定に従うことを拒否し、間もなくフランス国社会党 P S F を創設する。「新社会党員たち」の除名は、しかしフランス社会党の困難には終止符を打たない。この状況は、トレーズが一九三二年以来はつきり言い表わした、新連合の分析では共産党を力づける。「M II トレーズは、一九三三年七月の中央委員会の時、次のように宣言する。すなわち、フランスでは、ファシズムは各々の左翼政党の周りに、連合の形態を襲うことができる。今から、グラディエの指導下の新連合の政策は、国家の漸進的なファシショ化に働き、そして、社会党は、そのファシショ化にブルジョアジーを援助する。」恐慌のそしてファシズムの階級的な性格を告発しながら、共産党は、この基礎に出口の調査に大衆を組織するためその時単一の政治的勢力であり、共産党は、扇動するもしくは管理する、大衆の組織に主に任命される統一戦線政策を、まったく最初に統一労働総同盟とアムステルダム・ブレイエルを發展させる。グールドオー Gourdeaux は、一九三四年一月の中央委員会の時、有意義な仕方、次のように宣言する。すなわち、『防衛委員会、行動委員会、調整委員会』は、下部での統一戦線の実現の表現である。』（IRM 文書、六八一、一六四頁。）フランス社会党はその部隊から「新社会党員たち」を除名した問題について、その会員たちの若干の人々（少なくともフランス社会党によって非難された）はアムステルダム・ブレイエル運動に参加した問題について議論しながら、ドリオは、一九三三年秋の末に、フランス共産党指導部を、フランス社会党に接近しながら、彼の統一戦線政策を変更するように勧める。（D II ヴォルフ『ドリオ』パリ、一九六九年。）政治局の拒否で衝突した後、ドリオは、第一三回大会（一九三三年一〇月二八日）の時、彼の態

度を非難する、コミンテルンの前で討論をもたらす。この大会は、初めて、ファシスト独裁は少しもあらゆる国でブルジョアジー独裁の不可避的な段階にないことを認容し、だが、『主に社会民主主義を破壊する影響によって麻痺された、闘うプロレタリアートの勢力』は、単なる勢力をその到来を避けることができる状態にあることを再確認する。大会は、結果として、『社会民主主義を裏切る指導者たちにもかかわらず、そしてその指導者たちに反対して、社会民主党系労働者たちとの闘う統一戦線の実現のため、すべてのコミンテルンの支部を頑強に闘争する』ように巧く勤める。『社会民主主義の偽善の、裏切りの詭弁を大衆の前に詳細に暴露しながらそして拒否しながら、共産党員たちは、社会民主党系労働者たちを共産党の指導下に活動的な革命闘争に引きつけなければならぬ。』ドリオは、しかしながらその態度を固執し、（一九三四年）一月の中央委員会に次のような修正案を提出する。すなわち、『共産党の指導部は、フランス社会党の指導部に行動統一戦線を提案するため最も近い機会を捕まえるべきである。』政治局は、一九三四年一月一八日、ドリオを時間の制限なしで中央委員会の前で説明させるように決定し、トレーズが提出する開始報告の中で名指してドリオに対して攻撃しないように決定する。ドリオは、先ず、ファシスト勢力は頭を上げ、大都市のプチブルジョア大衆、農民たちそれに納税者たちを動員することができることが証明されるから、それだけ益々すべては不安な停滞を皆知っている、党、統一労働総同盟そして他の大衆組織の暗い図式を立てる。この損害を与える情勢は、ドリオによって、一九三三年の初めから党によって約束された『不十分な、不完全な、無能なそして矛盾する』統一戦線戦術によって説明される。党は、彼にとつて、『社会党の危機そして革命的統一戦線の強化の積極的な要素』になることを禁止した。彼は、下部での統一戦線戦術を上部での都合のよい提案によって完全なものにすることを提出しながら彼の調停を結論を出す。第一の資料は、ドリオの調停の短かい抜粋文を再生する。（『IRM歴史雑誌』一八号、一九八四年、一、一九三四年一月の中央委員会にドリオの調停（抜粋文）、四六一―四七頁。トレーズの演説。）M IIトレーズと彼の後にマルティは、ドリオの逆に、第一三回大会のテーゼを再確認する。すなわち、『首都における警察の暴力の、そして植民地における血生臭いテロ

ルの方法に少しも嫌がらないフランスブルジョアジーは、ジャコバン主義の民主主義的、さらに革命的な伝統を利用するよう興味を抱く、と、M II トレーズは宣言する。ブルジョアジーは、われわれは、『階級闘争が決定まで（エンゲルス）その都度繰り広げる国』であるということを理解し、『ブルジョアジーは、ファシスト独裁の急襲した企てが、わが党は党を徹底的抗戦主義まで、プロレタリアート独裁まで導くような指導をすることができるのである、広範な民衆運動をブルジョアジーに反対して反乱させる危険があるということを考えねばならない。』フランスは、それでもなお、ファシズムの過程を認識する。すなわち、『ファシズム、それは、大衆の革命的な飛躍の返答として、労働者階級に反対する大資本の公開された攻勢である。ファシズムは、民主主義の壁によって分離されない。ファシズムは、この資本主義の衰退の時期に貧困になった、破壊された、激化したプチブルジョアジーの階層の間に、そしてとくに労働者階級の後れた分子の間に、金融資本の独裁に対して、社会的基礎を与えるように努力する。』（IRM文書、六八一、一九頁。）ドリオは、ファシズムを諸団体に同化し、それによって、フランス社会党の多数派潮流を再び結合する。社会党の指導部は、ファシズムを大資本の戦略に同化する。『統一戦線は、目的ではなく、手段である。われわれの目的、それは、共産主義を実現させるためプロレタリアート独裁である、と、なおM II トレーズは言う。この目的を達成させるため、共産党は必要である。共産党の影響、さらに組織の強化に到達しない、すべての統一戦線、それは、統一戦線ではなく、その戯画化である。それは、社会民主主義の前で、資本家の敵対者の前で、降伏することである。』（IRM文書、六八一、四七頁。）ドリオは、同様にある断言を拒否する。統一戦線戦略と対立して、共産党は、他の戦略、すなわち、社会民主主義の危機を早めることを明確にする。

次のテーマは、共産党と一九三四年二月六日である。ファシスト諸団体は、二月六日、ダラデイエは信任投票を獲得しなければならぬ議会の前で、デモをすることを訴える時、フランス共産党は、二つの提案を捕えられる。すなわち、ドリオは、党の指導部に対して、一月末から諸団体の繰り返ししたデモに返答して、反デモを組織するため、フランス社会党

と労働総同盟に接近するように要求し、ドリオは、政治局の新しい拒絶に衝突し、そして、ドリオは、二月三日の『ユマニテ』紙（『過度の興奮ではない。』）に表われる、マルティの社説を返事として招き寄せる。パリの市地方局は、ドリオについては、党の指導部に対して、二月六日、中央のデモを組織することを援助するように要求する。第二の資料（一九三四年二月五日の書記局、一八号、四八頁。）に再生される決定に満足するため、政治局が提案を拒否する気にさせる評価がある。すなわち、右翼の組織に在郷軍人たちの怒りを組織する気懸りを残さないで、党は、特別であるスローガンの上に在郷軍人共和連盟 A R A C によって組織された反デモを支持するように訴え、とくに停車場の前で多くの連合を組織するように訴える。党の調停は、仲介した大衆の組織によって発展する。六月の全国協議会の前で発表された二つの調停は、パリ地方の活動家たちのため展開されそうになる困難さを証明する。第一の調停は、パリ市地方から、ランプ Lampe から発する。すなわち、『社会党は、次のように言った。あなたの所在地に残りなさい。われわれは、ファシストたちと街頭を争うためデモに行くスローガンを発した。：情勢は容易ではなかった。共和制の防衛の支持者であると考えた人々、そしてダラディエ政府を支持した人々、さらに、共産党員たちとファシストたちの間に一種の統一戦線は問題であったという証明しようと試みた、そして所在地に残るようにスローガンを与えた人々の間に、境界線を作ることは重要であった。』（IRM文書、六七七、一六四頁。）第二の調停は、西部パリ地方からマンニエ Mennier の調停である。すなわち、『二月六日事件、われわれは一瞬ためらった。われわれは、『ユマニテ』紙に現われた、そして在郷軍人共和連盟で署名された宣言書しか持たない。われわれは、シャンゼリゼ大通りの円形広場に、夕方八時に三、〇〇〇人のデモ参加者たちの先頭にいた。この連合の点以外に、連絡、正確な目的はない。途中で大きくなったわれわれの三、〇〇〇人のデモ参加者たちとともに、われわれは直ちにキアップが住んでいたホテル、すなわち、直ちに目的を選んだ。だが続いて、この目的を達成した後、われわれは誤ったり、そして、われわれは不十分な方法で労働者たちを戦闘に案内した。われわれは、パリの中で展開された闘争の最も誠実な点を無視した。』（IRM文書、六七九、一頁。）共産党（そして在郷

軍人共和連盟)は、階級的性格は避けることのできない、スローガンについてデモをするように訴えた問題は、在郷軍人共和連盟の三、〇〇〇人の会員たち(ドリオは会員たちに彼固有の主導権を急派した、サンドゥウニの第九の地区によって支持された)を右翼の諸組織に混じるように気にさせる、決定にまったく曖昧さを取り除くことはさらに十分ではない。曖昧さは、情勢の分析自体に説明する。すなわち、『われわれの訴えに、労働者階級は、同時に、ファシストたちに反対して、そしてあなたの腐敗した民主主義に反対して闘うであろう、と、モリスストレーズは議会で言うことを試みる。…ブルジョア民主主義とファシズムの間に性格の相違がない、それは資本の独裁の二つの形態である。ペストとコレラの間、われわれは選ばない。』(彼が議会で発表することができないこの演説は、小冊子の形で出版された、「フランス共産党の赤旗の下に」パリ、一九三四年。)『左翼の統治者たちと議員たち、急進党員たちと社会党員たちは、ファシスト扇動を養った、彼らはその扇動の先駆者であった』ことにより、共産党員たちは、なおまた、彼はしかしながら三六〇票対二二〇票によつて獲得する、信任をダラディエに対して拒否する。共産党員たちは、攻囲された会議から、ドリオとルノージャン Renaud Jeanによつて要求された、フランス社会党とともに共同行動に同時に拒み、(二月)六日から七日への夜に、社会党の左翼によつて共産党員たちになされた、行動統一の提案に受け容れない目的によつて答える。フランス社会党は、七日事件にだけ辞職する、『銃殺者ダラディエ』政府をなお支持する、ことは真実である。『共産党は、三〇年前、ドレイフュス事件の時、フランスのプロレタリアたちが深刻な危機を有利に使うのを妨げる、誤謬を一九三四年に避けることができた』と、(二月六日)諸事件の後少しモリスストレーズは書く。『共産党は、資本家たちの共和制を防衛する口実として、プロレタリアートの立場を放棄し、ブルジョア諸政党の言うなりに逼つて行く、ジョーレス主義者たちの日和見主義的な誤謬を避けた。共産党は、戦いに入ることはできないし、プロレタリアートの利害に二つのブルジョアの派閥の抗争を利用することはできないし、衝突の恐怖感で遠ざかる、ゲード主義者たちのセクト的な誤謬を避けた。』(『ユマニテ』紙、一九三四年三月一〇日。)しかしながら、議会の信任投票を獲得したばかりであるダラディエの

辞職は、問題のデータを変更し、政治諸勢力の各勢力をその態度を再定義することを余儀なくさせる。

次のテーマは、反撃、一九三四年二月七日―二月一二日である。グラデーエの降伏は、事実一九二六年七月にエリオの降伏は重大であつたよりも重大な結果である。正式に任命された内閣総理大臣は、初めて暴動と高官たちで結合された圧力に譲歩したし、そして機関の防衛や制度でその原理の中心自体を作つた急進党は、ドゥーメルグ内閣に入ることを受諾しながら、党にかつて耐えられた最も重大な打撃を保証した。議会は、内閣に四〇二票対一〇五票（九五票の社会黨員たちと一〇票の共産黨員たち）と二六票の棄権（若干の急進黨員たちと色々な左翼）によって信任を同意しながら、その固有な敗北を認可する。一九二六年七月は、急進党の破産をマークした。それは、一旦打倒された議會共和制である。一九二六年七月と同じように、右翼は権力の座に復帰するが、当時抵抗した国家機関は、今後危機中である。大衆の混乱を強調する危機は、大衆を自由に処分させ、同様にフランスⅡファシズムの発展の条件を創り出す。共産党指導部は、議會の解散と諸自由の尊重を要求するため、レピュブリク広場に九日の夜にデモをしながら、八日『社会党系及び共産党系労働者たち』を統一戦線の実現を早めるように巧く勧めながら、この脅威に答え、そして二重のスローガンによって彼の訴えを終える。すなわち、『資本の血生臭い独裁を打倒せよ！労働者農民政府万歳！』ファシズムと恐慌に独自の選択肢として考えられた、革命とソヴェエト（評議会）は議事日程に残っている。人々は、相違する戦略で活気のある諸政党での共同行動に大衆を約束しながら、大衆をその日程に準備することはできない。ドゥーメルグ政府は、公けの方法ですべてのデモを禁止しながらこの訴えに答える。共産黨員たちは、彼らのスローガンを維持する。そのスローガンは、党の幹部たちはデモに参加しないであろうということを政治局によってしかし決定された。ドリオだけは、命令を違反し、九名の死者たちによって清算されるデモの先頭を走る。社会党の左翼は、その左翼は八日にバステューユ広場で予測したデモに放棄し、ドリオは、同時にサン・ドゥニの第九の地区とともにデモに参加することを決定した。フランス社会党は、困難な立場にある。社会党の多数派の潮流は、産まれたばかりであり、しかも彼の分析の確認を理解する、諸事件によって不意

に打たれた。すなわち、ファシズムは、資本が諸自由を破壊し、『民主主義を締め殺す』ため暴力を利用する、恐慌の犠牲者たち、すなわち中産階級の自主的な現象である。実は、適当な議会の方法によって、人々は、この脅迫された民主主義を保護するであろうし、人々は、恐慌に答えることができるし、大衆を結集することができる。レレフオムドゥクストルクチニールすることに到達するであろう。党のファシズムの還元する分析の中で、そして権力の選挙獲得物の戦略の中で閉じ込められた、それからまったく自然に、(二月)六日、共和制を防衛するため急進党諸政府の単なる共和制の反射的動作について置かれた、フランス社会党は、ダラディエに『戦闘的投票』を調停し、さらに、ダラディエ政府参加を持続するように仕向けるため、七日、彼に提案する。労働総同盟の書記長とともに、さらに一時的なダラディエ内閣の内相とともに、ブルムは、脅迫された政府に民衆の支持の表現である、ストを注目させる。急進党の降伏は、従ってフランス社会党を不意に打つ。社会党の常任執行委員会によって、七日、採択された宣言は、代りの戦略を考えるのに党の困難さを明かす。『王党主義者たちとファシストたちの襲撃によって、さらに民主主義は権力を返した人間たちの不履行によって創られた重大な情勢の前で、社会党は、共和制的な、労働者的な諸自由の防衛に必要なあらゆる手段に準備していることを宣言し、さらに、諸自由の防衛の政府を作るため、共和制と労働者階級の将来をファシズムと反動の諸政党に引き抜くため、党の側で場所を占めようと試みるであろう、あらゆる人間に、あらゆる組織にアピールする。』(フランス社会党、第三一回全国大会、報告、パリ、一九三四年。)急進党の選択は、玉砕戦法に過ぎないという宣言を非難する。そして、反撃を組織するため、労働総同盟よりもより改良主義的な側では少しも、従って、存在しない。パリ地方の五つの統一労働組合は、この同じ目的で彼らの同等な労働総同盟員たちに申し込む間に、労働総同盟は、総同盟が反ファシスト的な目的にストを持続することを通知する。その総同盟は、初めにダラディエ政府を支持するためストを組織することを考えたし、ストを(二月)一二日に決定する。その行動を最も良く据えるため、労働総同盟は、総同盟がしかしながら共産党と急進党員たちを締め出す、左翼の主要な組織の支持を確認する。共産党と急進党員たちは、それぞれ総同盟の眼にあって『銃殺

者の内閣』に反対投票したという罪があり、ドゥーメルグ内閣及びもちろん統一労働総同盟を支持するという罪がある。予測された組織は、ストに平行した集会を組織することを決定する。人々は、デモにまで行動するであろうか。ポール・フォールは、ためらっている。レオン・ブルムは、社会党の左翼を支持する。『それは、ファシズムを後退させた二月二日である。』（速記報告、パリ、一九三五年。）と、ポール・フォールは社会党の第三回大会の前で宣言するであろう。フランス社会党は、党が完全な統御を持たない、そして、共産党が、その代りに数カ月以来調停されたアムステルダム・ブレイエルと統一労働総同盟によって占有する、活動の場、すなわち、大衆闘争の活動の場に遅れて参加する。（二月一二日の直後に、反ファシズム知識人監視委員会 C V I A の創立は、その創立が反ファシズムの分野を不完全にしか占有することを帰納的に知らせる。）労働総同盟によって発せられたゼネストのスローガンは、八日、『ル・ポピュラー』紙と『ユマニテ』紙の中で予告される。『ユマニテ』紙は、党が夕方自体レピュブリク広場に組織するデモに、九日同じく、アピールを公表し、統一労働総同盟のアピールは、一二日のストの成功を確認させるように訴える。労働総同盟は、労働者階級に対して、だが同時に農民たち、技術知識人たち、青年たちに対してそのアピールを差し向け、その運動の統一テーマを民主主義の防衛から作る。統一労働総同盟は、直接諸要求の防衛のため、さらにファシズムに反対する、大衆の要求スト及び政治ストを組織するように彼らの有権者たちを促し、そして、経営者と、労働総同盟の指導者たち及びいわゆる左翼政党によって実行されたブルジョアジーとともに、支持の政策そして協調の政策を告発する。二つの戦略は、従って存続するし、収斂は、その当時先ず第一に年代順である。下部での統一戦線戦略の適用は、しかしながら、統一労働総同盟を、階級的基礎でそれらの同等な労働総同盟員たちと交渉を始めることを、統一労働総同盟の労働組合、地方同盟、連盟に頼むような気にさせる。共産党は、併行して事件の組織のため単なる社会党の諸支部とともに議論するような気にさせる。これらの交渉の歴史は、作り続ける。A II プロストの論文は、パリと地方の間の不釣合、そして地方における統一デモの重要性をはっきりさせた。（『社会運動』誌、五四号、一九六六年。）しかしながら、多くの問題は提起

され続ける。すなわち、交渉はどこで起ったか。誰がその主導権を捕らえたか。要求、スローガン、移動についての方向が優勢であったか。移動は、デモが労働総同盟及びフランス社会党によって望んだこれらの『平和的な抗議』であるように考えられたか。移動は、その移動が怒り（経営者会議、右翼新聞、右翼当選者の住居：？）を触媒し易い場所の前に通る気にならせるように逆に考えられたか。現存する専攻論文、地方の出版物や県文書の体系的な検討は、これらの問題に答えることができるであろうし、統一戦線の過程の最善な接近を助成するであろう。セーヌ県で約束したあらゆる交渉は必然的に全国の価値を引き受けるので、パリのデモは特別な事件を構成する。『ルルポピュレール』紙は、九日、ナシオン広場に、一二日、デモをするようにアピールを発表する。『ユマニテ』紙は、一〇日、無言である。その一日（日曜）の初版は、デモに参加するように巧く勧める統一労働総同盟のアピールを再生する。実は、その再版だけに、共産党は明白にデモに参加するように巧く勧める。モリスストレーズは、三月の中央委員会の時、決定が一〇日の土曜日にデモに受け容れられたということを断言する。（IRM文書、六八四、八〇頁。）コミンテルンは、数日以来デモに参加する支持者たちである人々の一方を遅く有利にさせるのか。十分な資料の欠如は、その仮定の所に留まることを余儀なくさせる。^(一一)

次のテーマは、一九三四年三月の中央委員会である。フランスを揺るがしたばかりである諸事件を討議しなければならぬ、中央委員会は、実際三月一四日に開催される。ジットンが提出する報告は、二月二二日の政治局の時、討議された。第三と第四の資料は、当時採択された決議草案及び『主要な敵対者の』概念を導入するジツトンの報告の抜粋文を再生する。（二二、一九三四年二月二二日の政治局の決定、一八号、四九一五五頁、四、一九三四年三月一四日の中央委員会、ジツトンの開始報告（抜粋文）、五六一六一頁。）生じたばかりである諸事件はあらゆる点でコミンテルンの分析を認めることを証明した後、報告者については二月の諸事件の分析に至る。すなわち、『（六日の）反デモは、スローガン、連合点そして到達すべき目的にますます正確に、もっと重大な大きさをまとい得たであろう。しかし、六日の事件にわれ

われの戦いの態度は、労働者の反撃の出発点であった。ゼネスト及びその大きさを決定したのは、実に九日である。二月七日、パリ地方の五つの最も重要な統一労働組合は、二四時間ストの提案でもって同目的の労働総同盟員たちの労働組合を捕まえるであろう。社会党と労働総同盟は、彼らが運動にますます調停しなかったかどうか彼らは急いだ危険を感じたであろう。なぜゼネストであるか。統一労働組合は、自分自身で二四時間ストを主張したので、大衆は、社会党と労働総同盟を逃がれつつあったので、共産党の指導下に、運動は毎日もつと力をつかんだし、階級的活動の場に設定された。もしわれわれの党は実在しなかったならば、ファシスト諸団体の襲撃は、多分成功したであろう。ファシスト諸団体は、自由な街頭を発見したであろう、ゼネストが起こらなかったであろう。オーストリア社会民主主義のように、フランス社会党は不動状態の理論を発展させたであろう、フランス社会党は労働者たちにダラディエに信頼するように要求したのである。多くの場合、われわれは統一戦線の主唱者であったということを真面目な検討の結果として生じる。一般に、党の組織と統一労働組合は、提案の社会党と労働総同盟の組織を巧く利用した。』(IRM文書、六四八、二〇頁以下。)そして、協定は、ほとんど至る所で党のスローガンについて実現された。二三人の参加者たちは、続いて受け継がれる。彼らの若干の人々は、政治局によって、報告の各々の局面を証明するように委託された。かくして、モーヴェ Mauvais は労働組合問題に、アロワイエ Alloyer は組織問題に、ギユイオ Guyot は青年問題、等々に調停する。別の参加者たちは、三つの集団に分割される。地方の調停は、最も多数である。(ビユー Billoux 〓 マルセイユ地方、デュブイ Dupuy 〓 トゥール地方、ラミエ Ramier 〓 サンーエティエンヌ、ヴェイジェル Weigel 〓 ミュルーズ、ファジョン Façon 〓 ラングドック、M 〓 デリュモ M. Desrumeaux 〓 北部、クルタドゥ Courtade 〓 セイスヌーマリテーム。)同じ方法でかなり作った調停は、『九日は一二日を作った』と確認しながら六日から一二日まで諸事件の物語りをし、社会民主主義の影響を破壊する必要性そしてドリオの非難について結論を下す。第二シリーズの調停は、ジットン の報告の中ではつきり言った路線と全体的に一致している、中央委員会の会員たちから発し、思い切ってドリオを非難し、だが特別な

会期に中央委員会の召集をデータで要求したために、六日と一二日の間に過ぎ去った問題について十分な留保を表明する。大衆の組織の後に目立たなくなつたためにとくに党を非難する、ベルリオーズ *Bellios* (資料五は、ベルリオーズの調停の抜粋文を再生する)、スーペ *Soupe* 及びクロワザ *Croizat* が問題になっている。(五、一九三四年三月の中央委員会でベルリオーズの調停(抜粋文)、一八号、六一―六三頁。)当時党が実行する統一戦線政策に対する反対者たちは、参加者たちの第三のグループを構成する。すなわち、ジェラン *Jerran*、ルノー・ジャン及びドリオが問題である。ジェランは、共産党は、一二日、社会党のそして改良主義的な分子たちに対する言いなりに着席したということ肯定しながら、ジットンに反対するため最初の人として調停する。ジェランは、社会党は、『デモの果実を』反ファシズム監視委員会に『組織的に変化しながら』、事件の主要な受益者を明らかにしたという事実を証拠として探している。(IRM文書、六八五、九六頁。)ジェランは、自分の番に、六日、優勢だった破壊を批判し、明確なスローガンの欠如を遺憾に思う、ルノー・ジャンによつて後から従って行つた。ルノー・ジャンは、とくに六日及び九日のデモに対する政治局の会員たちの欠如を遺憾に思つた。ルノー・ジャンは、続いてついに社会党との関連に及び、彼が、六日、党の指導部と議論し出すように提案したし、だが彼は党の拒否に衝突したことを思い出し、最も遅く七日、バステュー広場のデモに関する社会党の提案を受諾し、公然と労働総同盟とフランス社会党に上部と下部の統一戦線の提案をしなければならなかつたであらうと考え、そして、ルノー・ジャンは、『もしフランス社会党と労働総同盟の破壊の状態は十分に進捗させたならば、あなたは正しい、だが逆の場合に、あなたは非常に重大な過失を犯す』と続ける。ルノー・ジャンは、党はデモに党の要求の性格と時々党のスローガンを与えたということを認め、しかし、地方とパリと同程度に主導権を握りかつ保持した、実は社会党と労働総同盟であるということを少なくとも考慮する。『党の指導部は操縦するように試したし、われわれを社会党と労働総同盟の言いなりに配置した。ゼネストとヴァンセンヌ広場のデモは、労働総同盟とフランス社会党によつて決定された、とわれわれは従つた。』この厳しい確実な事実によれば、二つの質問があつた。すなわち、今日何を

なすべきか。明日に向かつて何を留意し始めなければならないか。最初のファシスト攻勢は、組織は部分的に満足を得たという理由で、タルディユー前ファシスト政府の創設で、見事な、強力な労働者の反撃の事実から、停止された（だが、危険は残っている）。私は、詳細、皆がここで知っている証拠、ファシズムは宿命的にその経済的、予算的、そして政治的な攻勢を間もなく再び始めるように仕向けられる証拠を言わないであろう。私は、ただ準備される戦いの目的の重要性を言うであろう。そして、私は、皆がわが党内にすら理解することを確信していない。何の疑いもなく、未確定の期間の時期に、全体のヨーロッパのそして疑いもなくソ連邦の労働者たちの運命は勝負されようとしている、実はフランスにいる。もしも明日のファシズムはフランスを奪取するならば、反ソ連邦圏の創設のために、何らの妨害はもはや存在しないであろう。しかし、もしもファシズムは打倒されたならば、ファシズムの敗北はファシズムの最初の甲鐘となるであろう。従って、フランスにあらゆる犠牲を払ってファシズムを打倒しなければならない。私は、共和制の防衛とプロレタリアートの現実的な諸自由の防衛に閉じ込めりながら、ファシズムを打倒することは可能であるということを考えない。戦いは、ファシズムと労働者＝農民政府の間の戦いである。もしもわれわれが権力の獲得に対してファシズムをスピードで勝つならば、われわれはファシズムを逃れるであろう。『社会党に、全段階にファシズムに反対するイデオロギー的、肉体的な闘争の共通した組織を提案しな』がら、それは、行動統一を強化するように推測する。（IRM文書、六八五、五八頁以下。）二月諸事件以来（三月一日（そして多分二月八日、速記は欠けている。）の集会を除けば）、政治局の集会にもはや出席しないドリオは、直ちにルノー＝ジャンの後に調停し、ルノー＝ジャンと彼の完全な一致を確認し、そして、彼の分析の大きな中軸を回復する。それらの調停は、しかしながら重要な点で違う。ルノー＝ジャンにとって、『ファシスト組織は、タルディユー前ファシスト政府の創設とともに部分的な満足を獲得した。』さらに、ドリオにとって、ファシズムは諸団体に同一視されるかも知れない。ドリオは、諸団体の勢力の組織に移りつつあり、地方に向け、そして、『議会機関に巻き添えになる意思はない。』この違いにもかかわらず、ドリオとルノー＝ジャンは、お互いに

権力には、実は反撃の場所を設定する。問題は、ルノー・ジャンにとっても同様にドリオにとっても、スピードのファシズムを到達することができる、そして、ファシズムの前に権力の座に就くため、改良主義的な勢力とともに行動統一戦線を組織することができる、共産党員たちに提起される。それは、労働者農民政府とソヴェイトであくまで要求され続ける、ドリオのそしてルノー・ジャンの問題提起であるように見えない、共産党員たちは統一の最善な支持者として『現われた』し、常に統一戦線の操縦の巧みな概念で再建する演説をすることを願うドリオは、第二番目に矛盾を保持している。『もしもあなたは、綱領として、ファシズムに反対する民主主義の闘争、ファシスト組織の解散に対する闘争、大衆的防衛の組織の創設、あらゆる企業内に行動委員会の創造、労働者たちと農民たちに対する具体的な要求の綱領の作成：として、あたかもあなたが綱領に統一戦線を作るように想像するならば、そして、もしもあなたは、社会党員たちがこのような運動に参加することを受諾するように想像するならば、あなたはある問題を敗けるか。私は、数週間の終りに、社会党員たちは運動によってぐいぐい押され、追い抜かれるだろうと説得させた。』ドリオによって、革命的な展望の問題は提起される。少なくとも、デモは作られたであろう。(IRM文書、六八五、七六頁以下。)矛盾は、統一戦線の違った概念を発展するルノー・ジャンにおいて、その代りに、ずっと重要であるように見える。統一戦線の『目的は、加盟者たちを社会党に取り除くことはできないし、社会党員たちをわれわれの側でファシズムに反対して着手するように仕向けることはできる。』モーリス・ストレーズは、ドリオの後に少し調停し、一つ一つ、ドリオを第一三回大会の決議を対立させながら彼の打撃をドリオに反対して集中する。(資料六、M II トレーズの一九三四年三月の中央委員会で調停(抜粋文)、一八号、六三一―六六頁。)ドリオの不規律はしかも傷つけられているドリオを政治的に孤立させる心配事は、暫らくルノー・ジャンによって約束された基礎的な討論を掩蔽する気にさせる。党の指導部とそのしかしながら基礎的な反対者たちとの間の不一致は、事実三点に対象とする。その勢力は直ちに(二月)一二日明らかになったように、共産党員たちと改良主義者たちの各自の勢力がある。例えば断言と議論は、この第一点についてそして両方とも、デモの代りになる。参加者

たちが互いに投げ合う矛盾の実例は、歴史家に研究の手掛りを暗示する。すなわち、歴史はもっと広く作らねばならない一二日のストの組織の中で、活動の場について、労働総同盟と統一労働総同盟のそれぞれの役割は何であったか。実際にデモに拍子を付けていったスローガンは何であったか。すなわち、スローガンは共和制を防衛し、あるいはソヴィエトを建設することを狙ったか。スローガンは、協定に適合したか。初めに予見した道程は、迂回されたかどうか。町毎に念入りに作られた返答は、一二日の正確な意義の研究にもっと前進することができたし、党の多数派をその反対者たちに対立する討論において一刀両断に解決することができた、同じような問題がある。不一致は、続いてファシストの危険の大きさと性格を対象とする。緊急政令の中でとくにファシショ化の道具を見る党の指導部にとって、ファシズムはすでに国家の中にいる。ファシショ化は、ドリオよりももっとルノー・ジャンに近い。そこで、しかしながら収斂は立ち止まる。収斂に従って、緊急政令に反対してさらに権力のためではなく、差し当たって実は闘争を導く必要がある。それは、不一致の第三点を構成する。ルノー・ジャンとドリオは、権力のための闘争に対して優先権を与え、さらに、優先権はフランス社会党との統一を想定するから、この統一から社会党の統一戦線政策の特権的な主軸を作り上げる。共産党は、先ず第一に、大衆の政治ストを準備しながらさらに党の労働組合の仕事を発展しながら、緊急政令に反対して闘争することを要求する。少なくとも、それは、三月の中央委員会の前に、この中央委員会より後の政治局の集会の前に、ジットンによって提出された結論を実際に目立つ。『報告は、戦術問題を十分にマークをつけない。』と、このように、(イヴリー)全国協議会に提出されるはずである報告を議論する、一九三四年六月一五日の政治局の時、カデー(Cadé) (フラシオン)が宣言する。『もしもわれわれは変化しないならば、われわれは打倒されるであろう。もしもわれわれは経済的な戦いを組織することはできないならば、われわれはファシズムに反対する街頭の戦いを経験するであろう、しかしわれわれは打倒されるであろう。』(IRM文書、六八九、一二八頁。)三月の中央委員会の時、ベルリオーズの中に同じ分析はある。すなわち、『一連の多少象徴的な姿勢で作られたものとして、街頭の扇動であるものとして、反ファシズム闘争を考える必要

はない。それは、われわれをファッショ化、ファシストの危険を打倒することはできるはずである、日常の行動である。』（IRM文書、六八四、九一頁。）企業は、従つて中でもとくに戦いの場所である。一つの分析は、統一戦線政策がその後主として労働組合の活動の場に運ばれることを説明する。共産党員たちは、彼らが逆に部分的に反ファシスト的な組織の活動の場に主導権を失うことに反して、労働組合の活動の場に主導権を握り、かつ保持する。すなわち、アムステルダムIIブレイレルの消滅、反ファシズム知識人監視委員会の発展は、主導権を証明する。一つの分析は、同じくフランス社会党との議論が議事日程にないことを説明する。

次のテーマは、一九三四年五月の（コミンテルン）幹部会である。コミンテルンにおける十分な支持者を処分することを信じるドリオは、彼を党指導部に対立する紛争がコミンテルンの前に頼まれることを承諾する。サンリドゥニの地区における多数派たるドリオは、四月一日及び二日に集合したパリ北部地方の組織の協議会の時打倒され、激しく『ユマニテ』紙によつて党に打撃された。ドリオは、コミンテルンでの公開状によつて、二月諸事件の時無力のそして無気力の党指導部を非難しながら反撃する。人民投票の方法である選挙を挑発するため、ドリオは彼の市長の任務を辞職し、彼のキャンペーンを先頭に立つため、市の枠組を超える綱領を作成し、そして政府の真の綱領として提出する。すなわち、ドリオは、農民と中産諸階級の重要性を強調し、共産党員たちは、当時戦い、党は単純な同盟政策を要求する『ソ連邦の積極的な防衛』の概念に取り替えることを暗示する、この同様な国^{ナショナル}有^{ナショナル}化を主張する。MIIトレーズとドリオは、四月二日一日モスクワに説明に来るように招待される。前者は受諾する。後者は、招待を拒否するため選挙の近さを口実にする。ドリオは七五パーセントの得票によつて再選されたので（右翼は白票に投票するように訴え、共産党は別の候補者を推薦しなかった）、コミンテルンはドリオの招待を繰り返し、第二の拒否に衝突する。五月一六日モスクワで集まった幹部会の時、実はコミンテルンは従つて彼の不規律のためドリオを非難し、そして共産党を統一戦線の適用におけるもつと大胆に姿を見せるように勧める。資料七と八は、トレーズとマイルスキーの調停を再生する。（調停は、モンムソオーの調

停とともに入れられ処理する単なる調停である。) (七、コミンテルン、三四年五月一六日の幹部会、第一の演説家IIトレーズ、一八号、六七―七三頁、八、コミンテルン、一九三四年五月一六日の幹部会、第四の演説家IIマヌイルスキー、一八号、七三―七四頁。) 一九三四年五月、マヌイルスキーによつてはつきり言つた路線は、その当時ドリオが防衛した運動それ自体である。たとえデフレーションの新連合はなお存在するし、フランス社会党は新連合を支持するとしても、ドリオは一九三三年一月以来(少なくとも)統一戦線について彼のテーゼを守る。反対する社会黨員たちから帰ると、大衆闘争の中に改良主義的な潮流の約束をマークをつけた二月一二日の事件に、コミンテルンの勧誘は、ドゥーメルグ政府の創立より後である。コミンテルンの勧誘は、たとえフランス社会党の中に統一への潮流が大きくなるとしても、はつきり発音された。ドリオは、七日他の傾向に反対するフランス社会党の若干の少数派的な傾向を演じることを願つたし、ドリオは一月と三月の中央委員会の時要求する戦略は、術策的な概念から再建する。それは、もはやマヌイルスキーによつて五月にはつきり言われた戦略の場合ではない。統一戦線政策はだから再び定義されるように、なぜ五月に期待する必要があるのか。われわれは尊重したばかりである新しい条件は、二月の結果以降に創られなかつたか。コミンテルンは、ドリオが、彼の論理の中で右翼偏向の危険を説明できた転換点を約束する前に、正に孤立していた、証拠を手に入れることを決意したのか。三月の中央委員会に参加者たちのほとんど全体はしかしながら制裁を要求した、ドリオに非難するために、コミンテルンは従つてなぜ非常にぐずぐずしていたのか。ドリオは、彼の胸中にどんな支持者たち(恐らく)を処理したのか。われわれは開かれていた未刊原稿の資料は、この主題に進んでできなかったことを、われわれが承認することを余儀なくされる。モリスストレーズは、五月二五日の政治局の時彼の代表団を報告する。政治局は、同じ日、五月二〇日から二三日まで開催された社会党大会の結果を分析する。この問題について報告するプリーウールPrieur (ジットン) は、そこで展開された諸事件は社会党の危機について党の評価を確かめることを考え、まったく第一の理由でそこで明白となつた統一への潮流の上昇を強調する。すなわち、『色々な形態の下に、非常に違つた目的のため、しか

し全部が大衆運動を考慮する前に、演説家たちの多数派は、モスクワに代表団を主張する…。主要な決議についてはほとんど全員一致は、党の内部状況と矛盾している。パリ地方は、最も動揺された。パリ地方は、偶然ではない。すなわち、党の影響力、二月九日、ヴァンサンヌ広場、統一戦線の進歩は動揺された…。すべてそれは何を示すか。社会党系労働者たちの側で仕事を強化する必要性がある。統一戦線と労働組合の統一の問題の中に最も多くの大胆さがある。『三部会』はほとんど一般的な非難を掻き立てる、労働総同盟の中に可能性がある。統一の指導者たちの権威がある。それは、われわれを労働者たちと指導者たちを分裂させるため攻撃と議論に倍加するように許し、われわれを倍加するように仕向けねばならない。現実の時期に、すなわち、中央委員会の決定の土台において(?)、(そして、それは、ドリオが、われわれは上部でのあらゆる提案に敵対するように要求する時、ドリオが真実を変装させることを証明する)、社会党の常任執行委員会への提案があり、テールマンに対する共同行動がある。』(IRM文書、六八九、一〇〇頁以下。)カデー(フラシオン)は、このような提案は労働総同盟に対する幾つかの提案によって補足されることを暗示し、ピエルヴィ・ペリ(トレーズ)は、手紙は全国協議会によって県会議員選挙に関する社会党系労働者たち及び社会党の全体に対して差し向けられることを暗示する。六月一日の書記局は、この同じ方向で新しい決定をつかむ。すなわち、『一部の連盟局に対して、緊急政令に反対する、政令の廃棄のため、ファシスト組織の解散と直接の武装解除のため共同闘争を対象とする、労働総同盟の執行委員会に統一戦線の具体的な提案の作成を暗示することは…、要求は、労働総同盟系そして非労働組合系の労働者たちのために理解され、受け容れられなければならない』、要求は、かくしてフランス社会党と労働総同盟に作られる、あらゆるレヴェルで統一戦線の提案を発展させなければならない。要求は、とくに航空演習に統一戦線の大デモに対するセーヌ県連盟に提案を作る義務がある。(IRM文書、六九一、七六頁。)かように再び定義された統一戦線の履行を急がせることは、実は全国協議会の任務であらう。

最後のテーマは、一九三四年六月の(イヴリー)全国協議会である。反ファシスト闘争の統一戦線の組織をその議事日

程に持つ全国協議会の原則は、一月の中央委員会によって採択された。この中央委員会は、四月末全国協議会の開催を予見した。初めて五月一二、一三、一四日に延期された、全国協議会は、五月二五日の政治局の決定に従って最後に六月二、三、二四、二五日に開催する。三日間続くことを予見した全国協議会は、夜の二つの会議、すなわち、全部で一〇の会議でもって第四日目を延期する（六月二六日）。委任委員会の報告（IRM文書、六七七、二〇頁）は、参加者たちの横顔を描くことができる。

委任の検査。

審議者の委任 一四八人、諮問者の委任 八六八人、共産主義青年同盟（J. C.）一七七人の審議者、一一人の諮問者、婦人 三人の審議者、三人の諮問者。

社会的地位（は、審議者の委任だけ関係している。）。

人夫 七人、耕作者 七人、冶金業者 四一人、教師 六人、坑夫 七人、鉄道従業員 六人、木材労働者 一一人、官吏 五人、建築 五人、印刷工 二人、使用人 八人、郵便電信電話（P T T）労働者 二人、ドック労働者 三人、化学生産物 一人、電気工 三人、返送料付き照校電報（T C R P）一人、織物 四人、職人 六人、各種 一〇人。

一四人の同志は、公共事業の細胞に属する。

三六人の同志は、街頭の細胞に属する。

四一人の同志は、地方の細胞に属する。

四〇人の同志は、工場の細胞に属する。

五人の同志は、村の細胞に属する。

同志は、党に入党した。

一九一九年に八人、一九二〇年に一〇人、一九二一年に四人、一九二三年に六人、一九二三年に四人、一九二四年に八

人、一九二五年に七人、一九二六年に七人、一九二七年に七人、一九二八年に一〇人、一九二九年に一人、一九三〇年に四人、一九三二年に八人、一九三二年に一〇人、一九三三年に一六人、一九三四年に五人。

三人の同志は、一九一九年以前に黨員であり、中央委員会のメンバーには含まれない。

それは、一九一七年にドオルドーニュ地方のレイノー Raymond であり、一九一五年にリムージイヌ地方のヴァゼイユ Vazeilles であり、一九一六年にパリ南部地方のマラーヌ Marianne である。

一六人の同志は、彼らの細胞に職務を持つ。

四〇人の同志は、彼らの地区に職務を持つ。

五二人の同志は、地方の職務に持っている。

二〇人の地方書記の同志は、審議代表者である。

M II トレーズは説明する開始報告は、党の行動の連続性に確かな事実となり、それにもかかわらず当時明らかになる深い理論的進展を反映し、とくにコミンテルン第七回大会で準備委員会の中で表現される。マヌイルスキーは、彼が多くの国の現在の情況に不適當なものとして判断する、プロレタリアート独裁のスローガンを、もつと直接的なスローガン、すなわち、ファシズムに反対するそして民主主義の擁護のため最大の大衆の連合スローガンと取り替えることを提案した。その時まで優勢であった、概念について二つの重大な点に決潰させる。トレーズの演説における顕著な前進がある。

先ず民主主義の問題について、『民主主義に反対し、その破壊のために闘争することは、実はファシストたちである、と、M II トレーズは宣言する。議会はある程度に彼のブルジョアジーに反対する闘争における労働者階級によって利用され得るから、議会を廃棄したいことは、実はファシストたちである。共産黨員たちは、彼らはブルジョア独裁のあらゆる形態に反対して闘争し…、しかしブルジョアジーの政治体系がまとう形態に決して無関心でない…。共産黨員たちは、大衆自体によって獲得したすべての民主主義的な諸自由を防衛したし、防衛し、かつ防衛するであろう』し、諸自由を拡充

するように努力するであろう。共産党は、従つてその後国家はブルジョアジーのために矛盾の理由であり得たことを承認し、かくして理論的に国家は実現するのに準備する、政治的な連合を創設する。国民的無政府主義の拒否は、分裂の第二点を構成する。すなわち、『われわれは、一体革命的諸伝統の模範をフランスにおいてわが国を愛する。われわれは、わが国に、フランス人民の革命的な闘争を愛する。われわれは、一七八九年の偉大な歴史的な模範を愛する。われわれは、すでに一八四八年、一八七一年、プロレタリアートが参加した偉大な戦いを愛する。われわれは、わがプロレタリアートの全歴史を愛する。われわれは、すべてそのことを愛し、それは、われわれが先頭にあるわが国の将来、同じくすべての国々の労働者たちと勤労者たちの将来を持つ人々であるからであり、われわれが勤労者階級の福祉のために闘う人々であるからであり、それは、われわれがわが国を愛する理由がある。』（IRM文書、六七七、三八頁以下。）ファシズムに反対する掛かり合いにすることが相応わしい、統一戦線政策の定義は、定義に関して、六月二五日の政治局の決定の論理の中で登録され、しかし疑いもなく一部分に、フランス社会党とともに六月一日約束された最初の交渉は失敗によつて清算された事実によつて説明する、なお曖昧な言い回しに表現される。MIIトレーズは、事実として、全民衆階層の問題に順応する諸要求の綱領に向かつて反ファシスト闘争の広い統一戦線の創設を提案する。『社会党と労働総同盟は、彼らの綱領にかかる要求を挿入せざるを得ないであろう。そんな風に、われわれは、社会党と労働総同盟を非常に強い圧力に、大衆の抑制に服従させ得るであろう。社会党員たちと改良主義者たちは各々の要求を拒否することを大衆に証明することとは問題ではない。彼らは言語で受諾することを余儀なくさせた諸要求にとつて、彼らが事実闘うことを拒絶することを証明しなければならぬ。人々は、続いて諸要求をはつきりと言ひ表わす義務がある。われわれは、精力的なキャンペーンや大衆の行動の条件で、諸要求のために権力の確実性を巧くいかせることはできる。かくして、大衆の力で大衆の信用を増大するように、党は今日大衆を部分的な勝利に導くことを証明しながら、わが党の権威を回復するように処置することは必要である。（IRM文書、同書。）』従つて三月の中央委員会の時なお事実であつたように、ファシショ化の結果に

反対する闘争するには、仲介した大衆の組織によつてはつきりした態度を決めた統一戦線でもはや問題でない。党は、その後危機は国家の中心にまで矛盾を生まれることを承認し、直ちに政治的な戦いに参加し、そして統一戦線の主要な道具になる。そこで、重要な第三の更新は、われわれを存するように思われる。トレレーズの演説は、四六人の調停によつて後を付けられる（タイプライターで打った七五五頁。）調停の大部分は諸地方から発し、報告者と調停の一致を確認する。そのことは、ルノー・ジャンの調停を引き起こし、資料九に長い抜粋文を発見されるであろう討論を紹介するだろう。（九、一九三四年六月のフランス共産党の全国協議会（抜粋文）一八号、七四―八三頁。）『フランス社会党、社会党の市政、労働総同盟になされた提案は、提案の基礎と形態において私を完全に望みを叶える。』と、先ず第一にルノー・ジャンは宣言する。ルノー・ジャンは、一月と三月にドリオの姿勢を共有したと認め、しかし、ドリオに反対して協議会によつて提出させるであろうすべての制裁を投票する準備ができたことを断言させながら、その後ドリオと手を切る。『数週間前、ドリオが正しいと信じた、彼が党内で指導したいと望んだ政策に仕えて、人々は、ドリオが自分の規律違反を書いた、彼が一時的に自分の責任として引き受けたことを承諾することができた。今日、状況は違っている。ドリオは政策のために政治局との彼の不一致そして個人的な目的で利用したということは確実である。』この加盟宣言は、しかしながらドリオを新しい不平の原因をはつきりするような気にさせる。すなわち、人々は、路線を承認しないで、討論は党の指導する決定機関の中で起こらなかつたので、路線を変更した、ということとは、ドリオは確認する。（IRM文書、六七八、八三頁以下。）それは、資料七において再生された、一部分、ドリオを多くの返事を価値がある。モリス・トレレーズが発表する結論は、結論に関して、この問題について再び論じないし、統一戦線について転換点をマークをつける。『われわれは、あらゆる犠牲を払ってファシズムに反対する社会党系労働者たちと行動統一を望んでいる。われわれは、あらゆる犠牲を払って単一の労働総同盟における労働組合の統一に到達することを望んでいる。われわれは、ファシズムの扇動に中産階級を引き抜くため、中産階級を引きずり込むことを望んでいる。』翌日開かれた中央委員会は、中

中央委員会に関して、小冊子の形でトレーズの二つの原文を出版するように決定し、しかし第一の原文に手を入れて直すように決定する。『私は、その出版について、まったく一連の発展で第一の原文から不穏当な箇所を削除することは必要であると信じる、と、ジットン宣言する。はっきりした形を採らなければならない中心の問題は、実は統一の問題である。すなわち、危機の分析、ソ連邦との関係を発表することは必要でない。』（IRM文書、六八六、五頁。）多数の変化は、実際に紹介される。変化は、最初の原文において社会民主主義を対象として判断の顕著な軽減の方向に進み、しかしながら原文の深い進め方を変更しない。モーリス・トレーズと彼の後で中央委員会は、不十分に理解されたという感情を経験するのか。コミンテルンは、転換点の方法でもっと前進するため協議会中で調整されるのか。コミンテルンは、協議会に出席しなかったドリオは（Dillヴォルフの著書。）ついに完全に孤立したということを確信しているその時から、コミンテルンはもっと遠くに進むことはできると思うのか。これらの三つのデータは疑いもなく勝負をするし、われわれの資料は、そこでなお、ほとんどおしやべりが無い。（一九三四年六月三〇日の政治局の速記文字。）できれば秘密の、センチシヨナルな歴史の愛好家たちは、疑いもなく裏切られたであろう。われわれが検査したおよそタイプライターで打った三、〇〇〇頁は、われわれを討論においてもっと前に関与することができた。討論の公共資料は、われわれを単なる結論あるいは急速な分析法でしか打ち明け、しかし、暴露を抑制しなかったし、この時期によつて提出された多くの史料編集の問題に対して決定的な返事をもたらすようにできない。われわれは、同時に、共産党の内部審議とともに公共資料の合致の証拠、あるいは重要な決定は最終の分析でその上考察された問題の徴候を見ることができよう。⁽¹¹⁾

(1) 河野健二編『ヨーロッパ一九三〇年代』岩波書店 一九八〇年参照。

(2) 北原敦「イタリアにおける反ファシズムの諸形態」『歴史公論』一九八〇年二月 三五一―三六頁。

(3) Cf. Bulletin N°7 du Centre de Recherches d'Histoire des Mouvements Sociaux et du Syndicalisme (CRHMSS), Université

de Paris I (1982-83), Paris, pp. 59, 66-67.

(4) Jacques Girault, Sur l'implantation du parti communiste français dans l'entre-deux-guerres, ES, Paris, 1977, pp. 301-302, 拙稿「フランス人民戦線研究の新動向」『法学論集』一五巻一号 一九七九年 四〇―四二頁、拙稿「フランス人民戦線の研究」(日本国際政治学会『ニューズレター』一五号 一九八一年五月 五頁参照)。

(5) Cf. Bulletin N°4 du CRHMSS (1979-1980), p. 32. 例えは、向井喜典「フランス人民戦線運動と社会政策(Ⅰ)―その経済再建課題と関連して―」大阪経済法科大学『経済学論集』九巻二号 一九八五年 四頁、岡本宏「統一戦線史序説(四)」『熊本法学』五十号 一九八六年 五三―五四、五六一―五八頁参照。

(6) Cf. Bulletin N°4 du CRHMSS, pp. 43-45.

(7) Cf. Bulletin N°6 du CRHMSS (1981-1982), pp. 55-60.

(8) Cf. Bulletin N°7 du CRHMSS, pp. 19-20. Cf. Claude Mazauric, Quelques notes sur l'enseignement de l'histoire à l'Université de Moscou, in: Cahiers d'histoire de l'Institut de Recherches Marxistes (CHIRM), N°24, 1986, Paris, ex. L. A. Bendriko-va, L'historiographie française du Front populaire en France, Ed. de l'Université de Moscou, 1983, pp. 143-153.

(9) Cf. Roger Martelli, Une introduction à l'année 1934, le PCF, l'Internationale et la France, in: CHIRM, N°18, 1984, Paris, pp. 5-15.

(10) Cf. Ibid., pp. 16-23.

(11) Cf. Archives communistes, Février 1934-Juin 1934, Choises et présentées par Danielle Tartakowsky, in: CHIRM, N°18, 1984, pp. 25-34. Cf. Ibid., pp. 46-48.

(12) Cf. Ibid., pp. 34-46. Cf. Ibid., pp. 49-83.

付記 次は、拙稿「ブルム人民戦線内閣論の周りに」(仮題)を発表する。この成立は、五〇周年である。(一九八六年)主要な文

巻 44' Cf. Joel Colton, Léon Blum, Humanist in Politics, DUP, Durham, 1987, June '36, class struggle and the popular front in France, by J. Danos and M. Gibelin, London and Chicago, 1986, Jacques Kergoat, La France du Front populaire, Editions La Découverte, Paris, 1986, Archives communistes, Rapport de Benoît Frachon devant le Comité central des 15 et 16 février 1935, Extrait choisi et présenté par Danielle Tartakowsky, in: CHIRM, N°20, Paris, 1985, Michel Margairaz, Le Parti communiste, l'économie, les finances et la monnaie en 1935-1936: le «chaud» et le «froid», Des grèves de juin à la pause, «Le ministère des masses» au cœur des contradictions, Inédits de Maurice Thorez, présentés et annotés par Danielle Tartakowsky, Maurice Moissonnier, Front populaire et identité communiste à Villeurbanne (1933-1936), Des élections municipales à la «pause», Chronologie sommaire, etc., in: CHIRM, N°24, Paris, 1986, etc.

— 一九八七・一・一三 —
 — 一九八七・九・一〇 —